第5章

キャンパス・建物

先端研のある駒場Ⅱキャンパスは、東京帝国大学航空研究所から理工学研究所、航空研究所、宇宙航空研究所、工学部附属境界領域研究施設、そして先端研というように、戦前から戦後、そして現在に至るまで、めまぐるしい組織の変遷を経てきた。

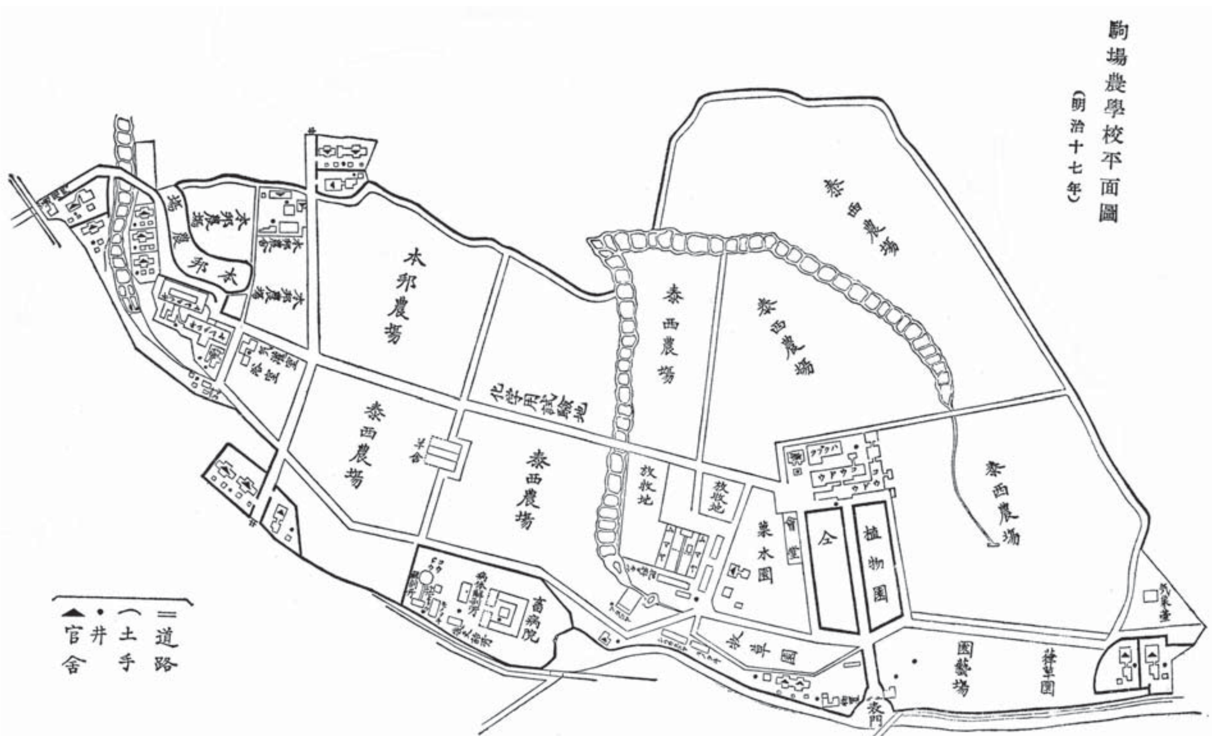
しかし、歴史の主人公にこのキャンパスそのものをおいてみると、主人公はずっと変わらずここにいたことになる。このキャンパスは戦災を被らなかったため、今もそこかしこに昭和の初期の研究施設の面影を残した歴史的価値の高い建造物が残っているのである。一方で、先端研設立以降、大規模な開発が進み、古い建物が取り壊され、新しい建物が続々と建設されている。

本章は、変化し続けるキャンパスの失われつつある過去を記録として残すことを目的に、駒場Ⅱキャンパスとその建物群についてその来歴をたどる。

第１節　駒場農学校から航空研究所へ

古くは駒場野と呼ばれたこの一帯は、徳川8代将軍吉宗のころ（18世紀初め）から将軍家の御狩場になっていた。明治に入って、1878年（明治11年）、この地に本学農学部などの前身である駒場農学校が開かれた。後に1890年、ここは農科大学の敷地となり、その後農科大学が東京帝国大学農学部に改称されてからは、その附属農場となった。

駒場の地に先端研のルーツである航空研究所がやってきたのは、関東大震災の後である。第１次世界大戦により航空機の兵器としての重要性が明らかとなったため、航空学の基礎研究の機関として、1918年（大正７年）、当時の東京帝国大学工科大学内に航空研究所が開設された。1921年からは越中島の埋立地に本拠を移転し、東京帝国大学航空研究所として規模の拡大が図られたが、1923年の関東大震災により越中島の研究所施設は壊滅的な損害を受けてしまった。そこで航空研は当時所長であった斯波忠三郎の指揮のもと再建を図り、1929年（昭和４年）、農学部の附属農場の西端に移ったのであった[1]。



資料5-1-1　駒場農学校の地図（1884年）
この地図の西端部分が現在の先端研の敷地にあたる。

1）『東京帝国大学50年史』下巻、p.1322。

第２節　関東大震災復興計画と航空研キャンパス

関東大震災（1923年）は東京大学のキャンパス全体に大きな影響を与えた。震災前、本郷キャンパスにはJ.コンドルが設計したレンガ造りの建物が多く存在したが、それらの建物は震災の影響で甚大な被害を受けた。震災後ただちに復興計画が検討され、当初はキャンパスを本郷から移転する案なども出たが、最終的には、当時建築学科の教授であり東京帝国大学の営繕課長でもあった内田祥三の指揮のもと復興がなされることとなった。内田は震災当時施工中であった安田講堂の設計を手がけており、また、震災でほとんど被害を受けなかった工学部2号館も設計していた。これらの建築は、細部のゴシック様式や、淡褐色のスクラッチ・タイル（表部分に引っかき模様が刻まれたレンガ）が貼られた外壁など、震災後の建築群に共通する要素を多くもっている。キャンパス復興計画は震災の翌年ごろから立案されたが、計画にはそれらの建物のデザインの影響が窺われる。

航空研のキャンパス整備は、この本郷の再建計画と並行して進められた。当時の駒場キャンパスは建物がほとんどない更地状態であり、キャンパスは何もないところにつくられることとなった。ここでも建築の基本計画を担ったのは内田祥三であり、内田ゴシック様式により統一された計画が立案された。

航空研究所の建物は内田の設計とされているが、一連の設計は清水幸重に任せられており、さらに実際の設計は清水の弟子であった岸田日出刀がほとんどをこなしたため、内田本人はほとんど関わっていない[2)]。たしかに、よく見ると先端研13号館は内田本来のネオゴシックの建築様式とはやや様相

資料5-2-1　1941年のキャンパス建物配置図
現存するのは1、13、14、15、17、22号館など、一部のみ。
（『東京帝国大学一覧』（1941年）の巻末記録「航空研究所建物配置図」）

を異にしている。たとえば、色違いのスクラッチ・タイルを多用していることなど、内田ゴシックの類型であることは間違いないのだが、内田の建築のもうひとつの特徴である、入り口に細長いアーチが多用された意匠は、13号館をはじめとする旧航空研の建築には用いられず、直線と真円を組み合わせたデザインが使われている。また、内田の建築は左右対称形のものが多いが、13号館は左右非対称である。かつて先端研に所属していた伊藤滋は、13号館の時計台は「ゼセッション」という折衷主義のデザインであり、昭和初期の国際建築の影響を日本流にたいへんうまく翻案して表現した時計台であると評価している[3)]。

17号館　工作工場と呼ばれる。南側にバーベキューのできるスペースがあり、「RCAST Garden」というプレートが掲げられている。

伊藤滋はまた、航空研時代の建物のうち1号館にある巨大風洞に使われた精巧な木工技術について、こう語っている。「あれだけの寄木できちっと、風洞の入り口からラッパ状に組み立てていく木工技術はもうないと思います。使っているのは、にかわですからね。にかわでピシッと貼ってある」。

1927年12月には一部庁舎が竣工し、逐次越中島からの移転が開始された。すべての施設の移転が完了したのは、1930年9月、震災の7年後のことであった。完成した航空研究所は当時東京帝国大学の中で最大の規模を持つ近代的な研究所であった。なお、当時は皇族のご訪問が相次いで行われたようである。今も13号館前に広い車寄せがあるのは、その名残であるとされる。

時計台のある13号館（1929年完成）をはじめ、風洞のある1号館（1928年）や、工作工場の17号館（1929年）、経営戦略企画室が2007年度まであった14号館（1930年）、クリーンルームが設置された22号館（1930年）など、当時建てられた赤レンガ造りの建物の一部は現存している。これにより、端正で風格のある緑豊かな航空研キャンパスは、その面影を今にとどめている。

一方で、先端研の初期に図書室が置かれた2号館（1930年）をはじめ、最も古い建物のひとつである3号館（1928年）、現3号館の位置にあった18号館（1929年）と19号館（1929年）などは、生研進出を契機とした再開発により、取り壊された。

これらの建物については、『先端研探検団報告』（第1回～第3回）で調査がされている。

13号館　各時代において本部棟として使用されている。通称時計台。

2）「内田祥三談話速記録（三）」『東京大学史紀要』第21号、2003年、「内田祥三談話速記録（五）」『東京大学史紀要』第23号、2005年。

3）伊藤滋元教授へのインタビュー記録による。

第３節　戦争と戦後復興期のキャンパス

航空学という、軍事研究とは切り離せない学問の研究によって拡大してきた航空研究所は、終戦とともに波乱の渦に巻き込まれる。占領軍は、戦時中における航空研と軍部との関係に強い疑惑を持ち、その研究設備を賠償物件に指定する気配を見せたのである。このため航空研の教官・職員は設備の保全作業に忙殺される事態に陥ったが、最終的には大学の一部局であるとの判断が優先され、大きな被害は出なかった[4)]。ただし航空研は、占領軍の圧力により、結局廃止に追い込まれることとなった。その後、理工学研究所、宇宙航空研究所、工学部附属境界領域研究施設など、駒場Ⅱキャンパスに立地する組織は次々と入れ替わった。

なお、戦争から戦後復興の期間、これまでのキャンパスの大枠は変わらなかったが、若干の建物が南部と西部を中心に整備された。1938年には現存する15号館、1942年にはすでに解体されている16号館などが建設された。西門脇にあった20号館（1941年）、21号館（1936年）も戦中の建物である。

1958年に航空研が復活して後、1961年に建てられたのが今もキャンパスの南西端にある60号館である。また、1964年に宇宙航空研究所が設立されて以降、若干の実験棟が追加されている。その中で45号館（1967年）、56号館（1972年）などは、耐震補強がされ、今後も使用される予定である。現在、新4号館、国際・産学共同研究センター、駒場オープンラボラトリーがあるあたりにも、宇宙科学関連の一連の実験棟が数棟、1960年代後半に建設されている。

資料5-3-1　宇航研時代のキャンパス建物配置図（1979年）
（秋山紀氏提供）

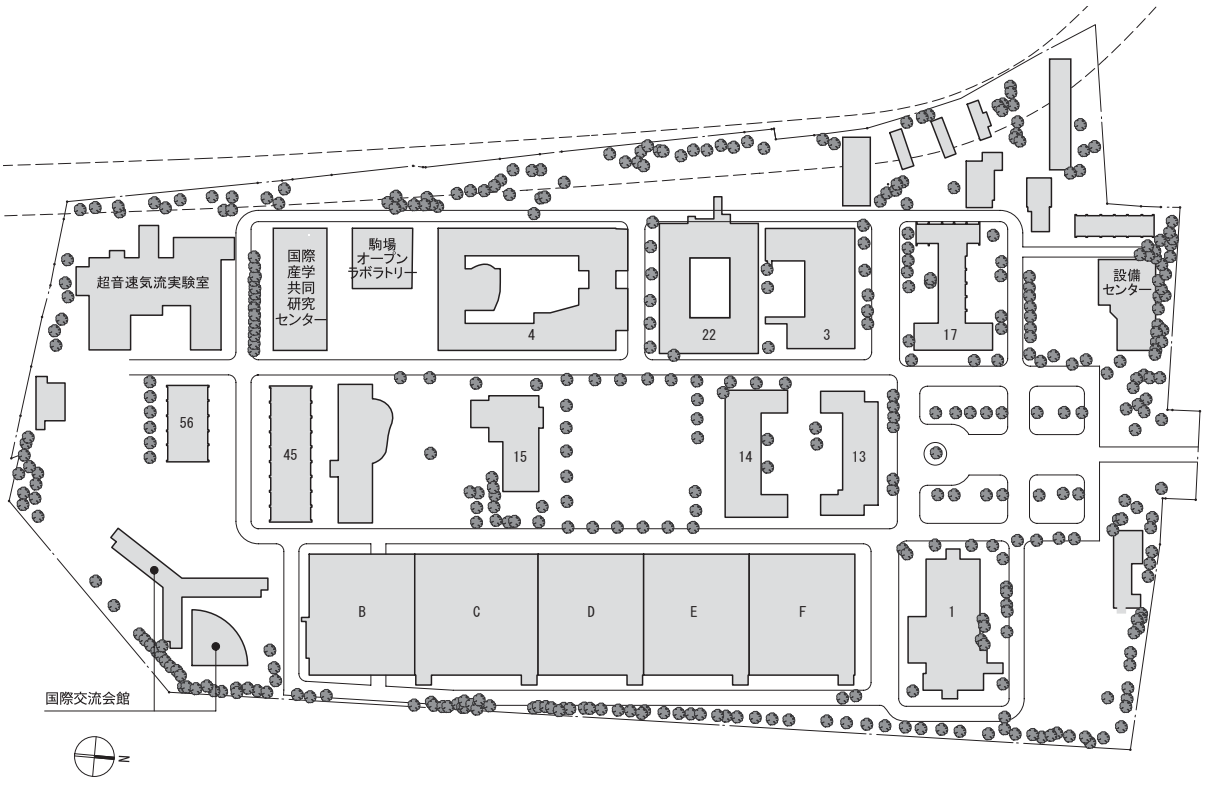
4）『東京大学百年史』部局史4、p.880。

第４節　先端研時代

駒場Ⅱキャンパスが大きく変貌を遂げたのは、先端研が設立されて以降、しばらく経ってからであった。

先端研が開設された当初、駒場Ⅱキャンパスは「緑の駒場キャンパス」と言われ、非常に余裕があったが、実際には宇宙科学研究所が出て行った南側部分など廃墟同然になっていたようだ[5)]。先端研ができてからも、当時の研究者だけでは広いキャンパスを使い切れなかったので、北側から敷地を徐々に使っていくという方針が採られた[6)]。また、既存の美しい建物を有効活用していくことに異存のある研究者はいなかったので、クリーンルームの設置などは行われたものの、建物が新規に建設されることはなかった。

一方東大本部は、このキャンパスの長期的な将来構想として、1、13号館は貴重な建造物であるため残し、他の建物はすべて取り壊す、という案を提示していた[7)]。この案では、先端研はキャンパスを東西に3つに分けたときの西側の北部、17号館から現4号館の北側のあたりを割り当てられ、東側一帯と現在の15号館、An棟、西側の南部を全学共同利用施設とし、南側に外国人向け居住施設を設



資料5-4-1　2005年のキャンパス建物配置図
（「駒場地区キャンパス再開発・利用計画要綱」、p.25より）

5）岸輝雄元センター長インタビュー録による。
6）教授総会添付資料「面積管理委員会議事録」（1988年4月26日）による。
7）「教授総会議事録」（1988年7月19日）による。

13号館前に航空研時代からある銅像　飛行をシンボル化したものと伝えられる。1号館と生産技術研究所という、それぞれの時代を象徴する建物が背景に写っている。

置し、17号館の北側に埋蔵文化研究所の建物を作る、13号館については四者間で共同利用、というようにキャンパスの区分けがされていた。

このように区分けされた背景には生産技術研究所の移転問題があると考えられる。六本木を拠点としていた生研は、当時開発が進められていた柏キャンパスに移転せずに、駒場Ⅱキャンパスに移転するという方向で本部に働きかけを行っていたのである。実際、すでに1988年4月26日の先端研面積管理委員会では、生研の駒場進出問題が議論されていた形跡がある[8)]。そしてその後、生研の駒場Ⅱキャンパスへの進出が決まり、キャンパス計画が固められたが、組織ごとの区分けは前述の本部案と大きく変わらなかった。2007年現在、生研は東側と南側の一部を確保するという88年当時の区分けに収まり、先端研は本部案の西北に加えて、1号館、13号館、14号館など、当初案よりも広い部分を占めている。これは、その後の先端研の組織的拡大、学内での存在価値の向上を反映したものであろう。

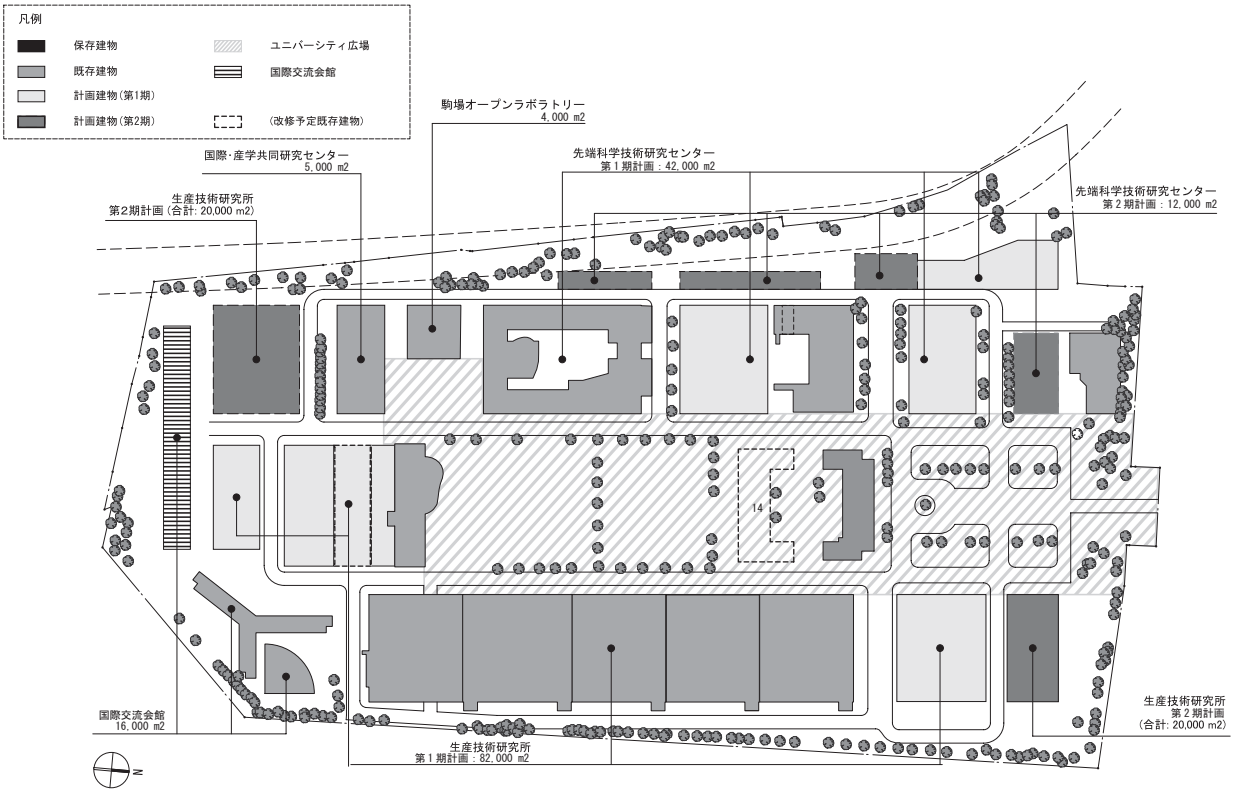
さて、この新たなキャンパス計画を担ったのは、当時生研で教鞭をとっていた原広司である。原は日本の都市の中心としては神社仏閣や城が一般的であり、大学が都市の基盤を作ってきたというのはおそらくなかった、と認識していたが、しかし大学は都市の中にあるべきであるとの信念から、都市の多様性に向かって開かれたキャンパス計画を立案した。その中心には公開空地（ユニヴァーシティ広場）が置かれることになった[9)]。

新しいキャンパス計画の経過をたどってみる。まず1991年7月9日の東大評議会においてキャンパス問題は本部主導で決定されるという方針が決まり、その後1994年7月14日の駒場地区整備委員会で、西側に先端研、東側に生研という配置が決定し、先端研の第1期、第2期工事が承認された[10)]。

そして1995年9月に18、19号館の解体工事が行われ、1996年2月以降、20、21、32号館等、キャンパスの東西の一連の建物の取り壊し工事が行われた。1997年2月には、先端研、生研の工事が本格化し、1998年1月には第1期工事が竣工、1999年6月には新4号館が完成、3期工事が竣工する。その後、2003年3月には新3号館が竣工し、2004年2月には13号館改装工事が行われ、2005年には駒場オープンラボラトリーが完成する。なお、この間の2000年9月には、キャンパス計画で「保存建物」と位置づけられている13号館が登録有形文化財に登録されている。

今後は、22号館が取り壊され、3号館の増築が行われるなど、キャンパス計画に従って順次整備が進められる予定である。

8）教授総会添付資料「面積管理委員会議事録」（1988年4月26日）による。
9）これに関して原は、「公開空地は、サンマルコ広場よりはるかに大きい空地で、そのある程度大きいということが重要な気がするんです」（「特集　開かれる教育空間」『建築』2001年5月号、p.103、新建築社）という印象的な発言を残している。
10）この項の内容は「キャンパス計画の歩みと今後の整備計画」（1998年10月19日教授会配布資料）に基づいている。



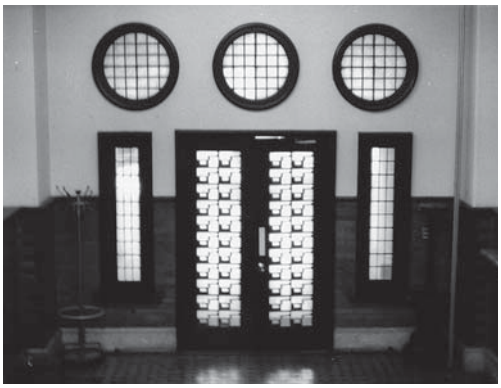
資料5-4-2　駒場Ⅱキャンパスの今後の開発計画

13号館以外の主要な昭和の建物は取り壊されることとなる。

（「駒場地区キャンパス再開発・利用計画要綱」、p.24より）

1号館

図書館があった旧2号館



13号館　玄関内側

旧5号館　かつては飛行機の格納庫だったとされる

手前旧22号館、奥旧21号館　かつて西門付近にあった

先端研生協食堂　かつてYS-11の設計などが行われた建物とされるが、真偽は未確認

新4号館